

モデル事業名	西神楽地域における「冬期集住・二地域居住 環境推進モデル事業」
活動団体名	特定非営利活動法人グラウンドワーク西神楽
ホームページ	http://nishikagura.web.fc2.com/
所属/ 担当者名	特定非営利活動法人グラウンドワーク西神楽 理事 谷川 良一
連絡先	0166-75-5305 (080-5583-6754) tanikawa.r@nifty.com
活動地域	北海道旭川市西神楽地域

活動地域の概要

北海道旭川市南西部に位置する西神楽地域は、旭川空港近郊の田園地帯である。全国的にも有名な美瑛町に隣接し、近年人気の旭山動物園に15分、富良野市なども車で1時間圏内にあり、美しい景観や自然、観光地に恵まれている地域である。旭川市の中心市街地までは車で20分程度で、中心市街地には、医療・福祉施設やデパート等商業施設など、生活に便利な施設が集中しており、田園環境と都市的利便環境との両方を享受できる地域である。



【位置図】



【西神楽聖和地区風景】



【田園風景】

活動地域の課題

近年少子高齢化が急速に進み、西神楽の四つの地区(瑞穂・中央・聖和・千代ヶ岡)の人口は平成10年には約4,500名であったが平成20年には約3,900名と10年間で約600名も減少した。人口減少は65歳以下の流出によるもので、西神楽地域の高齢人口指数は75%と旭川市全体の37%に比べ著しく高い。冬期集住試行を実施する聖和地区では、世帯数197世帯で65歳以上の高齢者が217名に上る。この中で居住先の除雪など積雪寒冷期の労働負担や、病院への通院や買い物などに必要な足の確保の困難さなどが要因で、農村からの人口流出が生じ、地域の活力低下が急速に進行している。

活動の内容

- ・平成20年度
 1. 地域の合意形成を目的とした検討委員会(2回)及び住みやすいまちづくりのためのタウンミーティング(1回)の開催
 2. 地域の高齢者を対象とした冬期集住意向アンケート調査の実施
 3. 冬期集住の試行及び参加者への実態調査の実施
 4. 都市住民を対象とした二地域居住意向ヒアリング調査の実施
- ・平成21年度
 1. 二地域居住に関する調査・検討
夏期滞在プログラムの策定と夏期滞在の試行
 2. 冬期集住に関する調査・検討
冬期集住プログラムの策定と冬期集住の試行・実施
 3. その他調査・検討
冬期集住・二地域居住ビジネスモデルの検討

活動の成果

・平成20年度

冬期集住の取組みでは、冬期集住の試行に参加した全11名の方々から、除雪からの解放、食事の提供、共同生活による安心感など、一人暮らしより便利で、離れて住んでいる子供の家族も安心してくれるという感想が多く寄せられ、ほぼ全員が満足という結果となり、この取組みが当地域の高齢者に大きな安心感をもたらした。また、当初想定していなかったマスコミ各社の取材により、本事業内容が短期間にも関わらず地域に周知され、浸透したことが大きかった。これにより、地域内企業からの集住施設の除雪支援や、集住施設近隣住民からの様々な支援（副食の提供や施設訪問支援）を受けるなど、互助の高まりがあったことは大きな成果であった。



【検討委員会の様子】



【タウンミーティングの様子】



【好評の手作り弁当】



【北海道新聞の紹介記事】

・平成21年度

二地域居住（夏期滞在の試行）の取組みでは、本年最初の入居者として神戸市内に住む退職者夫婦が1ヶ月入居した。その後は短期の観光客や、農業研修で当地域のイチゴハウス農家とトマトハウス農家に来た大学生等に夏期滞在を体験してもらうことができた。これにより、冬期集住・二地域居住の取組みが瑞穂・中央・千代ヶ岡といった周辺地区にも口コミやメディアにより広がり、次年度以降に冬期集住を実施してほしいとの声が上がっている。この動きの背景には、西神楽地域の多くの場所で、空き家や一人暮らし高齢者の増加など、同様の問題が内在していることや、今は健康状態や生活環境が安定している高齢者も、将来の生活に不安を抱えており、今後の生活のことを考え一度、集住を体験してみたいと考える人が多いことが考えられる。



【夏期滞在者の若者】

今後の課題及び展望

・課題

冬期集住の今後の利用意向については、次年度も是非入居したいという意見が多かった。但し、12月～3月の長期滞在になると、留守宅が雪に埋もれることや、育てている花や観葉植物、猫などの動物が心配になるという意見も多く、自宅を長期に離れても良い環境づくりが課題に挙がっている。また、集住施設の課題として、入居者全員分のベッドの提供、トイレの臭気取りの設置が挙げられている。更に、女性の入居者からは病院や買い物など車の送迎が必要であるとの意見が挙がっている。

・展望

冬期集住の取組では、通院や買い物など、特に女性の足の確保が大切であることから、平成22年度は移動サポートも含めた試行を検討する必要がある。また、夏期滞在者も移動手段を必要とすることから、平成22年度はカーシェアリングやレンタカーの割引、レンタサイクルなどモビリティ確保と組み合わせた夏期滞在の試行の検討が必要である。冬期集住の反響が高く、将来の理想的な施設の形態が示されたが、それまでの期間のつなぎとして、各地域数箇所の空き家を利用した集住施設の必要性を実感した。

